

ます。でも、後で戦場を見ると、たいいてい、これがあの戦場かと思つてしまいます。戦後、この凄いと思つた時の印象の話が広まっているのでしよう。

一部の人イデオロギーで戦後何度も虐殺だと言つて、その気になる人もいるようですが、南京の様子からは考えられないことです」

——揚子江岸などに死体はありませんでしたか。

「南京では見てません。私が上海、南京で記憶に残っているのは上海です。上海ではよく戦死体を見ました。戦場掃除をしませんから畑の中にもよくありました。それが印象に残つてます」

——第六十五連隊は十二月二十日、下関から浦口に渡るわけですが、この時下関に死体は？

「下関の棧橋から海軍の砲艦とか小さい船に乗つて渡りました。棧橋はたくさんあるらしいですが、死体は見ませんでした」

——南京事件は戦後知つた訳ですか。

「そうです。戦後、南京で虐殺があつたと聞いてびっくりしました。さつきも言いましたように、上海と比べると南京はあまり激しくない戦線で、福島民友と福島新聞の記者は十二月に帰つてます。私は揚子江を渡り滁阜まで行き、一月までいましたが、そういう話は聞いたこともありませんでした。

虐殺はなかつたと思います。戦後、噂話が広まつてなつたものです」

以上が箭内氏の証言である。

第一章

軍人の見た南京

……私は正直言つて、中国びいきです。満州国をつくつたのも賛成じゃない、日支事変も日本がやりすぎたところがあると思つています。しかし、南京の降伏拒否は中国が悪い。しかも、結局最高司令官の唐生智は逃げてますからね。……会社がつぶれる時と同じで、責任者がいなければ会社は混乱して、社員は物を持って逃げますよ。降伏拒否がなければ捕虜の問題も起きなかつたと思います。国際法上、とよく言いますが、国際法上から言えば中国のやり方はまずいと思います。

(松井軍司令官・岡田尚氏の証言より)



中山北路の安全区付近では水餃子の露店が出ていた。彼は日本兵のお客第一号のようだ（昭和12年12月15日）

一、陸軍

第十軍參謀・吉永朴少佐の証言

吉永朴氏は、第十軍の作戰參謀の後、第三軍高級參謀、第二航空軍參謀長などをつとめた人であるが、最後につとめた陸軍航空士官学校幹事としてよく知られている人である。明治三十年生れの吉永氏にとつて、南京攻略戦は四十歳、終戦の出来事は四十七歳の時とした体は健康そうに見受けられた。吉永氏は「南京のことをたずねられたのは初めてです」と言い、遠い昔のことを思い出そうと何度も首をかしげながら話してくれた。吉永氏から話をうかがったのは、昭和六十年もあと四日でおわりという十二月二十七日であった。最初、吉永氏から返事の手紙をいただいたのはその年の夏である。南京大虐殺は事実無根です、に始まり、巷間南京に関して言われていることに一つひとつ丁寧に答えてくれ、最後に、詳しく知りたいのならお会いします、ともあった。それでは、とお会いしたい旨申込み、返事を待った。ところがなかなか返事が来ない。高齢なのでいつも体調がよいとは限らないから、と気長に待つことにした。ちょうどその頃、陸軍大臣秘書官などをつとめた松前未曾雄氏から問い合わせに對する返事をもらった。ところが一カ月もし

ないうちに新聞に松前氏の訃報が載った。松前氏からもらった葉書からは、それらしきことが少しもうかがえなかつたのでびつくりした。吉永氏からはその後返事がなかつたので、もしかすると吉永氏にも何かあったのではないかと考え、直接聞く訳にもいかないので、借行社に問い合せてみると、健康らしいという答である。しかし、手紙を差し上げてから既に数カ月もたつていた。そこで、思い切って電話をすると、奥様が出られ、会えないという返事である。私から手紙をもらった直後、私と同じような用件で未知の人が会いにきてだまされたことがあったという。それでシヨックを受け、もう知らない人には会いたくない、これ以上シヨックを与えないでほしいというのである。

お氣持は察することができたが、詳しく南京の様子を聞きたいこともあり、改めて手紙と電話で申込み、最後はむりやり了解してもらった。そのため、話を聞いたのは十二月末になったものである。そういう事情のため、老人ホームにお住いの吉永氏には、この副支配人も同席するというインタビューになった。

こう書くと、いかにも殺伐としたインタビュー風景を想像されるかもしれないが、吉永氏は前もつてわざわざ老人ホームの中に一室を用意しておいてくれた。さらに私の質問は第十軍を糾弾するようなものだけだったが、それでも一つひとつ丁寧に答えて下さった。

第十軍の憲兵隊長・上砂勝七氏が回顧録『憲兵三十一年』に、次のように書いています。「第十軍は杭州湾上陸後、微発に頼つたため、軍経理部長は、こんな計画では責任が持て

ないから帰ると言い、田辺参謀長の口添えでおさまった」このような場面が第十軍の中でありましたか。

「上砂氏は存知上げていますが、軍司令部で顔を合わせることはありませんでしたし、こういうことはなかったと思います。次級の隊付・藤野鸞丈大尉もよく知っています。私が陸軍航空士官学校幹事だった時、藤野氏は東京憲兵隊の隊長で、上原（重太郎大佐）区隊長のことで何度も話し合っており、懇意の間柄です。こういうことは藤野氏からも聞いたことはありません」

——徴発はあったと思いますが……。

「第十軍は杭州湾上陸直後から任務上、上海派遣軍の背後に殺到するまでのクリーク地帯を猛進するため軍司令官以下軽装で、畔道をすべりながら邁進したものです。山砲も分解搬送しました。馬は疲労困憊し、佇立したままのものもありました。このような状況だったため車輛部隊は大行李にいたるまで上海に上陸させたものです。私の軍用行李も上海に行ったのでいろいろ困ることもありました。このような場合、孫子の名著にもありますように、『糧は敵に依る』ことは任務上やむを得ないことです」

——『憲兵三十一年』のなかには、「第十軍の軍紀が悪く、ために参謀総長の訓示がでた」ともあります。第十軍の軍紀は一般にどうだったのでしょうか。

「杭州湾上陸より南京攻略まで、確かに第十軍は迅速果敢でした。一部の論者は、作戦の果敢なりしに混同し、軍紀に結びつけて考えたものです。上砂氏がこんな論旨を述べたの

は遺憾の至りです」

——吉永さんは南京に行くまで軍司令部と共に行ったのですか。

「ずっと軍司令部にいました」

——南京に入るのは何日ですか。

「南京城攻撃の時、第十軍は洪藍埠に司令部がありました。この時になつてはじめて砲兵が参加して、十二月十二日には大分の部隊が城壁に日章旗を立てました。私は、田辺（盛武少将）参謀長より軍司令部の設定を命ぜられましたので、十三日早朝、中華門から入りました。一キロほど行つた朱雀路と建康路の交叉点のところに上海儲備銀行がありましたのでこれを軍司令部にあて、軍司令官が入られるように用意しました」

——その時の南京の様子はどうでした？

「城壁のそばには遺棄死体がありました。それは悲惨で、車に轢かれている死体もありました。これを見て、戦争には勝たなくてはいけない、敗けた国はみじめだ、と思いました。儲備銀行に行く途中、身なりいやしからぬ中国人の家族に会いましたので私は自分の名刺に、歩哨線を自由に通過させよ、と書いて渡しました。当日、家族が歩ける位ですから城内が落着いていることがわかると思います。また、城内に入る兵隊は制限されました。作戦主任でなかったので詳しいことはここで言えませんが、南京城攻撃の前、各師団に軍

命令が出されています」

——十四日以降はどうですか。

「二、三日してから作戦上の任務で下関に行きました。揚子江の埠頭に相当数の中国軍人の死体が水浸しになっていました」

——相当数というと、どの位ですか。

「正確にはわかりませんが、数千はあったと思います。第十軍は南京の南側からだけ攻めたのでなく、国崎部隊が浦口から攻めましたので、この時の死体と見えます」

——すべてが軍人の死体ですか。

「軍服を着てない中国人も相当ありました。あとで聞いた話ですが、南京には軍服が相当脱ぎ捨てられてあったと言いますので、軍服を着ていない中国人は便衣兵だと思います。軍服でない中国人の死体が吊るしてありました」

——どこにですか。

「はつきりませんが、吊るしてあったという記憶があります。潮のかげんで土手にうちあげられたのかもしれませんが。それを吊るしてあったように記憶してたのかもしれませんが」

——下関以外にはどこに行ってますか。

「紫金山にも登りました。入城式の前の十六日だと思います。紫金山での印象は特別ありません」

——当時、虐殺の話は聞いてませんか。

「全然聞いたことはありません」

——武藤章中支那方面軍参謀副長の回想録「比島から巢鴨へ」に、次のような箇所があります。

「松井大将は作戦中もずいぶん無理と思われる位中国人の立場を尊重された。この大将の態度は、某軍司令官や某師団長のごとき作戦本位に考える人々から抗議され、南京の宿舎で大議論される声を隣室から聞いたこともあった」この某軍司令官とは柳川（平助）中將のことと思われませんが、このような場面に出会ったことがありますか。

「さあ、何を議論したのか私にはわかりませんが、レディバード号事件（日本陸軍による英艦砲撃事件）を議論したのかもしれませんが。第十軍は入城式を済ませてすぐ杭州攻略に向いましたので恐らくこんな議論の暇はなかったと思います」

——杭州攻略はいつ頃決まったのですか。

「南京攻撃の時には既に決まっていたと思います。柳川將軍は杭州も占領すべしと言ってましたので、その意向で作戦主任の寺田（雅雄中佐）さんが立案したと思います。それを見具申しました。ですから、南京に入った時、すでに軍司令官は杭州に行く用意をしてました。柳川將軍は、上海—南京—杭州を結ぶ三角地帯を保有して、後は外交交渉に待つべし、との考えでした。東京に帰ってから、上奏もなさったということですよ」

——柳川軍司令官は最初から南京攻略を考えていましたか。

「ええ、そうです。当初、第十軍は上海を背後から衝くのが目的でしたが、その時から柳川軍司令官は南京を攻めるつもりでいました。ですから何度も意見具申をしています。大本営とは意見の相違が随分ありました」

——柳川軍司令官はどのような方ですか。

「私は第十軍にいた時、終始、柳川中將にお仕えしましたが、立派な方で今でも一番尊敬しています。寡黙な人で、一言で言えば、沈黙の勇者、と言えましようか。

柳川將軍は中国を愛された方でした。南京に向う進撃の間、われわれ数人の參謀を支那家屋の中庭に集め、中秋の名月を眺めながら、日中相搏つは本来からいうと望ましいことではない、と述べました。しかしわれわれの任務は別です。

杭州に行きましてから戦闘はなく、第十軍は落着いていましたので私はテニスをやったこともありす。間もなく寺田さんが東京に戻り、私も陸大の教官になるようにとの命令がありました。しかし私は残務処理がありましたので、陸大幹事の飯村稜少將にそのことを言つて残してもらい、藤本鉄熊大佐のもとで仕事を続けました。西湖のそばの西冷飯店に軍司令官があり、その近くの中国人の財閥の邸宅（逸云寄廬）に柳川軍司令官はお住いになっていました。柳川將軍はいつもお経をあげていると言われていましたが、私は第十軍の戦闘詳報を書き、何度か軍司令官の住いに署名をもらいに行きました。第十軍の最後まで残り、二月二十六日、柳川將軍が東京に凱旋される時、一緒に戻りました。

戦後、柳川將軍の奥様にもお会いして、お嬢様とは現在も連絡をとつています」

——二月上旬、參謀本部の本間（雅晴）第二部長が杭州に行つてます。お会いになったことがありますか。

「本間中將は陸大で英国事情を習つた恩師です。医師だった私の兄とも知り合いますが、杭州で会つた記憶はありません」

——南京では大虐殺があつたと言われていますが……。

「私は南京大虐殺はなかつたという信念を持っています。残つていたのはわずかです。また、中国市民は逃げ足が速く、ほとんど逃げています。残つていたのはわずかです。また、中国軍を何万も何十万もやつたとするなら、並べて機関銃で掃射するとしても、とてもできないことです。何十万といつたら押し合いへし合いで、歩けはしない人数です。しかし、南京にそんなに人はいませんでした。南京大虐殺は白髪三千丈式に、後で中国人が言つてゐることです。私の判決は、虐殺はなかつたということです」

以上が吉永少佐の証言である。

上海派遣軍特務部員・岡田酉次少佐の証言

經理將校であつた岡田酉次氏は、昭和五年、派遣學生として東大經濟学部に進んだが、すでにこの時、近代戦の特質たる総力戦のためには日支經濟ブロック、日支の經濟提携こそが必要だと感じたという。そして、昭和八年に東大を卒業してから終戦までの十二年間、參謀本部支那課、上海武官府、上海派遣軍、興亜院、汪政權顧問、支那派遣軍等々とほとんど中国關係で過ごしてきた。終戦の放送は周仏海上海市長と共に上海で聞いている。こ

の時、少将であった。

岡田氏の中国を舞台とした活躍と中国人との交遊は、回顧録『日中戦争裏方記』に記されているが、その長い中国体験のうち、ここでは、昭和十二年の南京入城時のことだけをお聞きした。

岡田氏は非常に穏やかな方で、小柄な体からはかつて少将であったとは想像もつかない。経理少将のせいもあるか。話をうかがった時は八十八歳であったが、すこぶる元気で、鎌倉の自宅から横浜にある一部上場の会社に毎日出勤している。戦後、岡田氏は実業界に入り、かつてこの会社の副社長もやり、現在は顧問をつとめている。

岡田氏は昭和十一年四月、参謀本部支那課から上海の大使館付武官府にかわった。中国経済の調査研究のためで、そのため別館を設けて従事することになった。翌十二年八月、上海派遣軍の上海上陸と共に軍司令部特務部員として現地で従軍した。名前はかわっても仕事は同じで、派遣軍の中の経済工作の責任者であった。支那事変においては、軍事攻略はもちろんであるが、経済工作、政治工作も重要であった。その経済工作のため、岡田氏は南京占領と同時に南京入りすることになった。

—軍司令部について南京に入城したのですか。

「いいえ、先頭部隊に随行して入城しました。南京城を攻撃する時、上海派遣軍司令部は湯水鎮にあり、私もここにいました。上海派遣軍には朝香宮殿下が司令官としていらっし

やいました。中支那方面軍は松井大將が軍司令官、塚田少將が参謀長でしたが、司令部は未だ湯水鎮までは来ておりませんでした。

私は派遣軍司令部にいましたが、陥落後はできるだけ早く中国の銀行を処理しなくてはならなかったので、陥落間近になってからは前線部隊と共に進みました。弾が飛んでくる中を車で進みましたが、進む途中、南京城から湯水鎮の方に逃げてくる敗残兵とも会いました。また、数珠つなぎで後送される捕虜とも出会いました。十二日のことです」

—何日に南京城に入りました？

「十三日の昼頃、中華門から入りました。南京には四日ほどいました」

—その時の城内の様子はどうでした？

「城壁のすぐそばにはそれほど多くの死体はありませんでしたが、城内を進むと、途中には多数の死体がありました。最初、交通銀行に入りましたが、このあたりまで来ると、死体はそう多くありませんでした」

—交通銀行に入ったのは日本人ではじめてですか。

「ええ、日本人では私をはじめです。内には誰もいませんでした」

—日本兵が宿舎として使うとか……。

「私がいる間に入ってきました」

—銀行の内部はどうでした？

「建物内はガランとして主要帳簿など、何もありませんでした。お金は一枚の法幣もあり

ませんし、備えつけ金庫は明け放しのまま、恐らく政府が逃げる時、関係者が全部持つていったでしょう。たとえ残したとしても、中国兵やら市民が略奪したろうと思います。そこで、今一つ最短距離にあった銀行、たぶん中国銀行だったと思いますが、ここを偵察しました。しかし、これまた交通銀行同様の風情で全くの空家なので、あきらめて銀行調査は二行だけでやめました」

——中島（今朝吾中將）第十六師団長の日記に、銀行の金庫から略奪する日本兵がいる、とありますか……。

「この前発表になった（昭和五十九年十一月二十一日読売新聞）中島中將の日記ですね。

銀行の話ですが、私の見た銀行には全然お金はありませんでした。私が最初に入つてますから確実です。この日記には些か疑問が残ります。

もともと、四大銀行のほかにもいくつかの普通銀行があり、これらの銀行の多くがその本店を南京に置いていました。これら銀行の支店も随所にあつたようである。その辺には多少取り残された紙幣があつたのかもしれない」

——中島日記には、法幣を円に替えて日本に送る者もいる、と書いてますが、円に替えることはできたのですか。

「上海に行けばできました。上海には租界があり、その通貨は法幣が中心でしたが、日本銀行券も使われていましたのでいくらでも替えられました」

——しかし、日本には送金できないでしょう。

「上海には正金銀行があつたが、大蔵省財務官の承認がなければ送金はできませんでした。もつとも外務省や軍の扱う官金は別です。児玉譽士夫は軍にお願いして官金の型で内地に送金したという話を耳にしたが、恐らくそれは軍の経理部の承認で、各部隊には経理担当将校があり、この人の承認があればよかつたのでしよう。この経理担当に無理矢理お願いして承認をもらう人もいたようです」

——同盟通信の従軍記者だつた前田雄二氏が、回顧録で、十一月末、蘇州で山になつて散乱した法幣を日本兵は拾おうとしなかつた、と書いています。中島日記によれば、それから一カ月もたないうちに南京では金庫破りまでして法幣を求めるといふことです。

どちらが本当でしょうか。

「十一月の蘇州というと、戦争は続いており、兵隊もいつ死ぬかわからないし、紙幣どころじゃなかつたかもしれません。南京でそういうことがあつたのなら、戦闘が一段落して気持ちに余裕ができたからでしょうか」

——南京城に入ったのは中国の銀行調査のためだけですか。

「もう一つ重要な仕事がありました。つまり、兵隊は南京戦の時から軍票を持っていた訳ですが、これが実際南京で通用するかどうか見届け、それによって今後、軍票をどうするかという大きい問題がありました」

——岡田さんは入城式前には南京を去つてますが、その間、物の売買とか軍票が使われるような場面がありましたか。

「多少はありました。場所は中華門の外だったと記憶しますが、城外だったということはつきり覚えていません。いわゆる泥棒市がポツポツ立っていました。本格的な泥棒市ではなく、城壁の出入口の外側で点々と立ちん坊が商売を始めかけていました。また市場の体をなしていませんでしたが、古本や骨董品のようなものを売っていました」

「売ってる人は中国人で、買うのは日本兵ですね？」

「そうです。売子は骨董品のほかに紙巻煙草の一本売りをやっていました。軍票が実際通用するかどうか見ていると、これがあまり使えない。むりやり軍票を渡している日本兵もいました。それを確認した上で十五日か十六日、たぶん十六日だったと思いますが、上海に自動車で帰りました」

——第十軍の柳川（平助中將）軍司令官とお会いになったことがございますか。

「柳川中將とは縁があるのですよ。私が昭和八年、少佐に進む時、東京大学経済学部派遣されて勉強などしていたので部隊勤務の年数が足りなくなり、そこで急遽第一師団に行くことになりました。その頃、柳川中將が師団長をやっておられました」。

また、南京戦のあと、興亜院の調査官になりましたが、この時の総務長官が柳川中將です。柳川中將は立派な方でした」

——松井（石根）大將とは？

「私は松井大將の軍の特務部にいましたので上海で何度かお目にかかっています。相手は軍司令官の大將でこちらは一介の少佐ですから、直接話すようなことはめつたにありません

でした。それでも私は、支那とはブロック経済で仲良くやっていかなくてはならないと思ひ、また、支那のことはよく調べていた支那愛好者と自認していましたので、そうした関係の会合で会うことは以前から時々ありました。

南京入城後、松井大將はわざわざ私に南京入城の漢詩を書いてくれますし、東京に凱旋してからも天皇陛下からの賜物を分けて下さいました。その時、こんな心をかけてくれたのかと思つて頭が下がりました。

松井大將は支那人がかわいくてかわいくて仕方なかった人でしたのに、南京事件の責任でああなつてしまつて、お慰めの言葉もありません」

——四日間南京にいた訳ですが、虐殺と言われるようなことをご覧になつてますか。

「虐殺とは無抵抗の人を集めて射殺するとか、そういうのを言うと思いますが、全く見ていません。南京城陥落後、報告のため上京して一週間ほどでまた南京に戻ってきました。

その時は入城式後間もない時で、万事は混沌としていましたが治安は一応落ち着いていました」

——虐殺があつたと言われますが……。

「あの南京攻略戦を見ますと、中国軍の中には女がいました。私も女の中国兵が倒れているのを見えています。また、敗残兵と言つても抵抗するものもいたし、便衣隊というものもいて、これらがやられるのを見ました。これらの屍があつて虐殺と言われたのではないでしようか。

戦闘中所々で、日本兵が中国人の家に火をつけていました。そのままにしておけば自分の寝泊まりに使えるのに、と思つて取り調べてみました。歩哨で立たされている時、前方の茅屋に支那兵が隠れていて、射つてくると言つてました。寝る場所より命が大事だから焼き払うということでしょうか。人間として、やられる前にやつてしまふということは当然なのかもしれません。

ただ、助命を乞う人を何かなしにやつつけられるものではありません。中にはきのうまで一緒だった戦友がやられて敵愾心に燃えている日本兵もいたでしょう。その上、心もずさんでいますし、多少の虐殺は否定できないでしょうが、戦場の動機を今ここで判断するのはなかなか難かしいと思います。南京の場合、特に野の戦争と違つて町の戦争で、しかも城郭の中というのが、問題を一層複雑にしたと思います。

またこういうことがあります。上海の租界地にはライカなどのいいカメラが売つてまして、軍の証明があれば、今でいうノー・タックスの店で安く買うことができました。上海で戦つた兵隊で、上海戦が一段落した時、租界地に入りしつてカメラを入手した者がずいぶんいました。その兵が南京まで行つてます。私も現にカメラを持って南京に入りましたが、こうした兵隊が南京で何を撮ると思ひますか。梅一輪を撮りますか。そうではなく一般には普通見なれないもの、常識はずれなもの、悲惨なもの、例えば、まず死体などを撮ります。撮つたフィルムは上海から商人が来てましたから、その商人に現像を頼むと、それが上海租界地で外人に流れ、レポートとして海外にも流れる。この一枚の死体の写真が

全体のイメージを作りあげる。南京ではそういう傾向がありました。

汪兆銘政権の経済顧問をやつていた人たちの集りが年一回あり、この集りには福田越夫

(元総理)さんも来ますし、私も含め皆さん中国人に知り合いがたくさんいる人たちです。戦後になつてこれら中国友人から聞かされたのですが、中国には昔から漢奸という言葉があつて、時の権力者に手向う者は事の正否に拘らずすべて漢奸とされる、これと同じ考えで、自国のことは絶対悪く言わないということ。だから今更南京のことを持ち出して、殺害はさほどひどくはなかつたなどと言ひ張つてみても、中国側は認めないと思います。

思うに事実は一つであつて、現在の言論界の如く、誰々があつたからといつてむきになつてこれを反論してもしょうがない。そんなことに惑わされずに何処までも事実を追求すればよいのです。そうすれば後世の人がきつと正しく判断してくれましょう。」

以上が岡田少佐の証言である。

上海派遣軍参謀・大西一大尉の証言

南京攻略戦とそれに続く南京占領について考える時、これらを全般的に、しかも細部にわたり知りえたのは、上海派遣軍なり中支那方面軍にいた人たちであろうと思われる。特に上海派遣軍は、八月から中国軍と戦ひ、作戦の全般に通暁していた。また、南京占領後、城内の中山北路にある首都飯店に軍司令部を置き、二月まで南京にとどまつた。第十

軍が杭州攻略のため十二月十八日に反転し、また、中支那方面軍も江南全体を把握するため、十二月二十二日、上海に戻ったことを考えれば、上海派遣軍が南京について一番の情報をつかんでいたことがわかる。

上海派遣軍司令部には軍司令官のほか、参謀長・飯沼守少将、参謀副長・上村利道大佐、それに参謀がいた。この中で健在なのは大西参謀ただ一人である。

大西一氏は明治三十五年十一月生れ、陸士三十六期。陸大を卒業して一年後の昭和十年に参謀本部の支那課に配属され、昭和十二年八月に上海派遣軍の参謀になった。大尉で三十四歳の時である。

昭和十三年二月、上海派遣軍がなくなると、今度は中支那派遣軍の南京特務機関長として、そのまま南京に残った。一年後の昭和十四年、軍務局軍務課員として東京に戻る。終戦は、第十三方面軍の司令部があつた名古屋で迎えている。大佐であつた。

上海派遣軍司令部には参謀が十五人おり、三課に分かれていた。一課は作戦、二課は情報、三課は後方担当である。

二課の課長は長勇中佐で、長中佐の下に本郷忠夫少佐、御厨正幸少佐、大西一大尉がいた。第二課の仕事は中国軍の情報収集で、どの師(師団)がどこに配置されているかについて調べることも必要であつた。中国軍は軍閥の領袖による軍の集合体だけに、師ごとの強弱がはっきりしていた。中国軍の配置の状況を知ることがきわめて重要だったのである。当然ながら、第二課は中国をよく知る者が配置された。大西大尉はそれまで二年間、参

謀本部第二部支那課の兵要地誌班にいたが、所属していた時の班長が長勇中佐であつた。共に軍の支那関係者である。昭和十一年十二月になって長班長は漢口に駐在武官として行き、大西大尉は残つた。しかし、大西大尉も翌十二年八月には上海の大使館付武官補佐官として支那に行くことになった。内示があり、旅費も貰い、準備を整えていた。

しかし、七月に蘆溝橋で起きた戦火は八月に上海に飛び火し、上海派遣軍が編組されることになった。武官補佐官どころではなくなり、派遣軍参謀としてそのまま上海に行くことになった。長中佐が漢口駐在武官から来た。本郷少佐も長沙駐在研究員からやってきた。日中全面対決で漢口の駐在武官、長沙駐在研究員が廃止されたからである。

第三課は補充、通信が主な任務で、捕虜についても担当する。寺垣中佐が課長、榎田、榊原、北野、佐々木の各参謀がおり、榊原(主計)少佐が主に捕虜の担当をしていた。

大西氏には、いろいろ噂のある長勇第二課長のことからうかがつた。

——昭和六十年三月号の『偕行』(陸軍の将校の集りである偕行社から発行されている月刊誌)に、松井(石根)大将の専属副官であつた角良晴少佐の証言があり、それによりますと、長参謀が虐殺を命令したとありますが……。

「私は長参謀の下にいましたが、長参謀が命令を出したということは、見たことも聞いたこともありません。

角証言については、長参謀が命令したという第六師団は第十軍隷下で、上海派遣軍では

ありません。上海派遣軍が第十軍の師団に命令することはありえないことです。また、情報担当の長参謀が命令するというのもおかしい話です。長参謀は中支那方面軍の参謀も兼任したと言ふ人もいるが、私は聞いたことはありません」

——田中隆吉少将も、戦後、『裁かれる歴史』の中で長参謀が虐殺を命令したと書いてますが……。

「田中隆吉氏については、こういう話があります。田中氏が兵務局長の時、私は軍務局の軍務課にいまして、その時、閩錫山（えんしやくざん 山西省の軍閥）をなんとかしようという問題があり、そちらに強い田中兵務局長が閩錫山に会いに行くことになりました。」

結局、田中兵務局長は閩錫山本人とは会えずに、使いの者と会って話をまとめたと言つて帰ってきました。まとめた内容は、日本が閩錫山の軍隊に小銃を与えるということですが、ところが与える小銃の量というものが、日本の一年間の製造分に匹敵する量でした。これを聞いた私は、一体どうしたことかと思つて田中兵務局長に「いさがつてこずらせました。この様なこともあり、当時から氏の言うことは信用できませんでした。」

戦後の東京裁判の証言も考えると、田中氏の言う長参謀の話は信じられません」

——鈴木明氏の『南京大虐殺のまぼろし』によれば、第十三師団の山田梅二旅団長に長参謀の虐殺命令があつたと言いますが……。

「南京攻略が間近になつた時、軍司令部は湯水鎮にあり、窪地の石造小屋を司令部にしていました。その時、私は句容にいましたが、いよいよ南京攻撃というので十一日に呼び戻

されました。この湯水鎮にいた時のことですが、朝起きると、周りの山に中国兵がたくさん現れました。司令部では大慌てで、そこらにいるすべての兵を集めて攻撃しました。われわれ参謀も万一の場合官様をお守りしなくては、と部屋の周りをぐるりと取り囲みました。本来なら副官の仕事ですが、その時は私たちも死ぬつもりでいました。やがて敦賀の連隊長が大隊を指揮して車で来て事なきをえました。」

第十三師団が捕虜を捕まえた時というのは、上海派遣軍の司令官に朝香宮殿下を迎えたばかりで長参謀も相当気を使つていました。そういう時ですから、いわれるような命令を出すはずがありません。」

長参謀はいわゆる右翼で、上海では頭山満翁から贈られた陣羽織を着ていました。右翼の子分も上海までついてきて、長参謀は、僕に、彼らを自由に使うようにとよこしたことがあります。そんな人ですから、官様の前ではできるはずがありません」

——人間としてどんな人ですか。

「長参謀とは参謀本部支那課と上海派遣軍の二度一緒に仕事をやりました。激しい人でしたが、支那に対しては理解ある人でした。無理を言う人ではありません。二課にいる人は中国をよく知つてゐる人ばかりで支那に同情してました」

大西参謀が南京に入ったのは十三日午後である。中山北路の首都飯店あたりでは、まだ戦闘中であつた。上海派遣軍司令部が中山北路にある首都飯店に入ったのは十日後である。朝香宮中將も入つた。翌年二月に派遣軍司令部が任務をおえてなくなるまでここにとどま

る。占領時のさまざまな命令はすべてこの軍司令部から出された。

——第十六師団の中島（今朝吾中将）師団長の日記に「捕虜はせぬ方針なれば」とあり、これが捕虜虐殺の証拠だとも言われていますが……。

「これは銃器を取り上げ、釈放せい、ということですが。中国兵は全国各地から集っていますが、自分の国ですから歩いて帰れます」

——軍の命令ということはありませんか。

「このような命令を出していません」

——捕虜の扱いは第三課ですね。

「そうです。寺垣（忠雄）中佐が課長で、おとなしい人でした。担当は榊原少佐で、この人はもつとおとなしい人です。軍の中でも一番おとなしい人でした。ここがそのような命令を出すことはありません。榊原参謀はついこの間まで健在で『僭行』の『証言』による『南京戦史』のため、一緒に僭行社にも行きました。その時は奥さんがよくないと早めに帰りましたが、奥さんより先に亡くなってしまいました」

——中島第十六師団長もいろいろ言われていますが、どんな人ですか。

「当時中島師団長は中将、私は大尉。とても話をしたりするような間柄ではありません。直接にはほとんど存じ上げていません」

——第十六師団は上海派遣軍に属していた訳ですから、何らかの接触は？

「私個人としては、師団長が指輪をしているのを見て、いい感じを持たなかった記憶があります。中島師団長はフランスに留学しており、そのような習慣がついたものでしょうが、戦場で指輪とは、と思いました」

——松井大將が中島師団長の統帥を非難されたと言われていますが、本当でしょうか。

「中島師団長は中国の家は焼いても構わんと言ったらしい。もちろん、松井大將の前で言った訳ではないでしょうが、それを聞いた松井大將が私に第十六師団に行ってくるようにと言われた。だから松井大將が中島師団長の統帥について注意をうながしたことは確かだ。私は十六師団に行くことは行つたが、大尉の身分で師団長に直接言える訳もなく、十六師団に上陸以来よく知っておる参謀がいたので、その人に伝えた」

——普通、将官が将官に言うことはないでしょうが、松井大將が直々に注意なさらなかったのでしょうか。

「軍司令官が師団長に直接言うのはよほど重大なことです」

——中島中将といえは、最後は軍司令官までつとめ、日本陸軍の代表の一人でもある訳ですが……。

「……。私と同期の者が中島連隊長のもとにいた時、陸大を受けようとしたが許してくれないと憤慨していた。連隊長の許可がないと受験できない訳です。中島師団長は人の好き嫌いが激しかったらしい。私には中島中将の悪い話しか入ってこなかった」

——占領後、十六師団が南京警備にあたりますが……。

「南京陥落後、第十軍が引揚げ、南京には上海派遣軍が残った。上海派遣軍で南京攻略戦

に参加したのは、第九師団と第十三師団と第十六師団だ。このうち、第十三師団は既に揚子江を渡っている。

警備司令官を誰にするかということが派遣軍の中で話になった。第九師団長か第十六師団長だ。中島さんを毛嫌いする人が多くて、私が第九師団長にお願いしましょうと言いつつ決まった。そこで第九師団に警備を任せることになり、松井大将の命令で私が光華門のところにある第九師団に行った。ところが第九師団の参謀長（中川広夫）が、上海では自分たちの戦場掃除もしないで南京攻略に向った、上海の戦場掃除をしたいので御免していただきたいと言う。それで代りに第十六師団が南京を警備することになった」

大西さんは各師団との連絡もやっていたのですか。

「私は上海派遣軍参謀だったが、第三艦隊参謀も兼任していて、旗艦出雲にも部屋があった。だから、海軍との連絡もやっていた。また、派遣軍の中では連絡係だったから、各師団の動向、意向を軍に伝えることが仕事だった」

第十六師団の旅団長・佐々木到一少将が南京城内の警備司令官になりますが……。

「知ってる通り、佐々木少将は随一の支那通と言われていた。ただし酒を飲むと乱れた」
中支那方面軍の参謀副長だった武藤章大佐の回想録『比島から巢鴨へ』に次の様な箇所があります。

「松井大将は作戦中もずいぶん無理と思われるくらい支那人の立場を尊重された。この松井大将の態度は、某軍司令官や某師団長の如き作戦本位に考える人々から抗議され、南京

の宿舎で大議論をされる声を隣室から聞いたこともあった」

この場面にいらっしやいましたか。

「そのようなことは全然知りませんでした。私は武藤軍務局長に非常にかわいがられまして、軍務局には六年も勤めました。しかし、武藤さんからその話を聞いたことはありません。武藤さんは方面軍ができた時、参謀副長になり、松井さんと一緒におられたので、このことは間違いないでしょう」

某司令官とは柳川平助中将、某師団長とは中島中将とありますが……。

「師団長は中島中将に間違いはない。軍司令官は柳川中将しかいない。松井さんとの大激論は疑問に思います。若干の意見の齟齬はあったかもしれませんが、大激論とは一寸考えられません」

十三日以降の南京の様子はどうでした？

「十三日はまだ戦闘が続いています。首都飯店付近までしか行けませんでした。

挹江門に行った時は両側が死体でいっぱいだった。

十七日か十八日に下関シヤンカに行つたが、揚子江には相当死体があった。土手ではなく、江の中で。掃蕩によるものでしょう。この死体は年末まであった」

挹江門の死体はいつ頃まであったのでしょうか。

「全軍の慰霊祭（十八日）の後まであった。あるいは二十日過ぎまであったかもしれない。その後、特務機関主催で挹江門内で中国軍慰霊祭をやりました。その時には挹江門内外

は奇麗になっていました。私が主催でしたが中国側市政府関係、日本官憲、一般中国人も参列し、四、五百名は集りました」

—上海派遣軍の中で虐殺があったという話はおきませんでしたか。

「話題になったことはない。第二課も南京に入ってから、軍紀・風紀の取締りで城内を廻っていました。私も車で廻った」

—何も見てませんか。

「一度強姦を見た」

—白昼ですか。

「そうです。すぐ捕えた。十六師団の兵隊だったので十六師団に渡した。強姦は私が見た以外にも何件があった。最初は慰安所を作るのに反対だったが、こういうことがあるので作るようになった。そういうことは第三課がやった」

—その他、暴行、略奪など見てませんか。

「見たことがない。私は特務機関長として、その後一年間南京にいた。この間、南京はもちろん、蕪湖、太平、江寧、句容、鎮江、金壇、丹陽、揚州、滁県を二回ずつ廻ったが、虐殺を見たことも聞いたこともない」

日本軍が南京に向っている時から占領した後まで、軍中央部から現地に、何人かが派遣されている。攻略中の河辺作戦課長、多田(駿中將)参謀次長、陥落後の阿南(惟幾少將)人事局長、本間(雅晴少將)参謀本部第二部長などがよく知られている。

戦後になり、軍中央部からの南京視察があったことは、軍中央部が南京事件について何らかを知っていたのではないかとこの憶測を呼んでいる。

—本郷参謀がアメリカ大使館に、略奪について釈明に行っていますが……。

「第二課の参謀の中では本郷参謀が最も古く、そこで外国との交渉は自然と本郷少佐が行ったことになった。南京に行つてからも、用件のくわしい内容は知らないが本郷少佐が行ったのは覚えている。米英の權益を尊重せよということは九月の上海の頃からやかましく言われていた。第三師団の蘇州河の戦いの時、河の左の米英の工場から機関銃がこつちを向いている。それでも米英の權益ということを手を出せず、くやしい思いをしたこともある」

—西(義章)中佐が南京に行った事を知っていますか。

「覚えていません。西氏は私が軍務局へ帰つた時、参謀本部謀略課におられたと思います。もちろん来られたとしても何の用件かわかりません」

—本間第二部長が二月上旬、南京に行つてますが……。

「存じていません」

—アメリカ權益保護のため行つたと当時の記録にありますが、虐殺事件のためと言う人もいます。

「もしお出でになつたとすれば、第三国の權益関係と思います」

—広田中佐が上海派遣軍に派遣されていますが……。

「ええ、覚えています。ただし、私とは年の開きもあつたので詳しく話をした記憶はあり

ません」

——古閑（健・東部防衛参謀）大佐と会ったことは？
 「当時は全然存じあげていません」

昭和十三年二月、上海派遣軍、第十軍は廢止になり、中支那方面軍が残り、新しい任務のため、人事が一新された。上海、南京、杭州を占領し、作戦は一段落したからである。名前も中支那派遣軍と変った。大西参謀はそのまま中支那派遣軍の特務機関長として南京に残った。

昭和十三年頃の南京見聞記には、〇少佐、あるいは若い特務機関長、といった名前が、頻繁に出てくる。大西氏のことである。

南京特務機関長は陥落直後の十二月十四日、佐方繁木少佐が就任し、二月に入り臼田寛三大佐と交代した。しかし臼田大佐は十日ほどで大西大尉と交代した。大西大尉は既にそれまでも特務機関の仕事を行なっていた。当初、大西氏は大尉だったため、南京特務機関長補佐官長と名乗っていた。上海・杭州など他の特務機関長が大佐、中佐クラスだったためである。一カ月後の三月に少佐に昇進し、この時始めて南京特務機関長を名乗った。南京と周りの九県が管轄であった。各県に五人から十人ほどの特務班員を置いて、これら全体の指揮をとった。この特務班員は陸軍省が雇ってよこしたもので、いわゆる軍属である。大西氏は主に南京において中国側との折衝の任にあたった。

特務機関長時代、ある日、中国人が、日本軍に家を壊されている、と訴えてきた。一緒に行くと、南京駅のそばで、その中国人の家と周りの家とり壊されている。とり壊している兵隊に聞くと、谷田勇大佐の命令だという。すぐやめさせ、谷田大佐に会いに行った。谷田大佐は大西氏が陸大の学生の時の工兵の教官、その時は中支那派遣軍の後方担当参謀であった。聞くと、上海からどんどん軍需品を送ってくる、南京駅周辺に積まねばならぬので周りの家をとりのつぶしている、という。これでは作戦上仕方ないと思い、そこですぐに城外にバラックを二十軒ばかり作り、ここに中国人を住ませた。

このように、南京特務機関長は、中国の様々な問題に対する日本側の窓口である。南京市民の実態を最もよく知り得る立場にあった。

——二月から一年間、特務機関長として南京に残る訳ですね。
 「参謀本部の支那関係者は支那に行くことになっていった。こういう時期でもあるので、そのまま特務機関長として支那に残ることになった」

——南京攻略戦での日本兵の死体は、すべて日本人が荼毘に付すなりしたのでしようか。
 「全部日本人の手でやりました。上海戦では日本兵の死体は残ったでしょうが、南京戦では残った死体はほとんどありません」

——中国兵の埋葬は日本軍が指揮したものですか。
 「中国兵の死体は中国人が埋葬しました。埋葬するのに日本軍に連絡するということはありません。逆に軍が紅卍字会に、どこそこの死体を埋葬するようにと頼んだことがある」
 ——紅卍字会をご存知ですか。

「赤いマークをつけて、よくやっていた」

——自治委員会も埋葬活動をしたと記録にありますか……。

「自治委員会も働いたが、死体の埋葬はそんなにやらなかったと思います。紅卍字会が中心にやってました。それから、何とかいう団体が埋葬したというが……」

——崇善堂ですか。

「そうそう。当時、全然名前を聞いたことはなかったし、知らなかった。それが戦後、東京裁判で、すごい活動をしたと言っている。当時は全然知らない」

——昭和十三年に入り、南京の郊外は安全だったのでしょうか。

「ほほ安全だった」

——日本人も来て商売しますね。

「日本人のことは総領事館がやってた。われわれ特務機関の仕事は、支那側の行政を援助することであった。総領事館には福田篤泰君が一人でおって、粕谷（孝夫）領事官補があとで来た。特務機関は交通銀行の二階を使っていたが、その一階があいていたので、総領事館が開く前はそこを総領事館として使っていた」

——南京事件を知ったのは戦後ですか。

「そうですね。松井大将がそのことで起訴されたと聞き、私は証人になると申しました。松井大将が帰ってからも南京特務機関長として残り、南京のことはよく知っていたからです。しかしその時、私は第十三方面軍のことで戦犯に指定されましたので、戦犯が証人に

なるのはとの話があつてとりやめになりました」

——昭和十二年から昭和十三年にかけての南京は大西さんが最も詳しいのですか。

「そうだと思います。十数年前、朝日新聞に『中国の旅』が連載された時、あまりに当時の日本軍と違うので、抗議に行つて本多（勝二）記者を詰問したことがあります。

南京事件は戦争裁判で取り上げられたが、その後、話題になるようなことはなかった。ところが、『中国の旅』の頃から今度は、日本人があつたと言ひ出した。その時、真実を知っている自分こそ本当のことを書くべきだと思ひ、書こうとしたことがあります。しかし、身内の者から、今さら書いても遅い、言ひ訳がましくて世間は信用しない、と言われてやめにした」

大西氏は、朝日新聞が連載した「中国の旅」以来、マスコミの報道に不信感を抱いており、当初、私のインタビュー申込みも断っている。だから大西氏のことをマスコミにのることはない。南京事件を知る上で、現在、最も重要な人であるが、一般になじみがないのもそのせいであろう。

大西氏からお話をうかがった後、当時、南京に入城した人々をたずねると、そのうちの何人かは、南京のことなら大西氏が最も詳しい、大西氏の言うことなら正しいと確信する、などとおっしゃった。松井大将付をしていた岡田尚氏、砲艦勢多の艦長・寺崎隆治氏、中支那方面軍参謀・吉川猛氏などである。

ここにある大西氏の証言は、誠に貴重なものであると改めてつけ加えたい。